様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３０１０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４１３７

研究課題名（和文）地域実践活動を手掛ける臨床心理士のモデル化に関する研究

研究課題名（英文）Research on modeling of clinical psychologists who engage in community assistance activities

研究代表者
牧野　高壮（Makino, Takamasa）

北海道科学大学・未来デザイン学部・准教授

研究者番号：３０４５８１３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、地域実践に携わる臨床心理士（５名）を対象として、実践がいかに始まり展開してきたかを実践ストーリーとして収集した。得たストーリーを分析し特徴を抽出した。その結果、実践を構成する７つ（他者との関係性、現実状況との葛藤など）の特徴を得た。しかしこれら実践特徴は発達的な意味をもつと推測されたため、１年後新たに３名へ当該の実践がどう変化しているかを調査した。その結果、外的な環境と実践家の内面的な体験が、相互に影響しながら実践は展開していた。地域実践は、実践家のプライベートに近い環境で行われるため、実践家の日常変化が実践活動へダイレクトに反映しやすく、両者の境界が曖昧になりやすいと考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多様化する社会のなかで臨床心理士に求められる介入は一様でなく、それらにどう応ずるかという課題がある。受身的中立性に代表される、臨床心理学の訓練から学ぶ臨床心理士の態度は、地域実践では大きく異なることが指摘されていた。そして本研究では、実践家による内面的な変化と実践活動の展開が大きく結びつき、相互に影響を及ぼしながら進むことが明らかになった。地域での実践は、実践家のプライベートと近い環境で行うため、プライベートによる変化が実践へダイレクトに反映しやすかった。この知見はこれまでの臨床心理学における実践姿勢と異なり、実践家としてこの姿勢を自らの取り組みにどう用いることができるかという視点を提供した。

研究成果の概要（英文）： In this study, we interviewed 5 clinical psychologists and analyzed their local practices, from their first experiences until now. Their experiences were analyzed to find traits and see how they felt in certain situations.
As a result, we found seven local practices (relationships with others, conflict in real situations, etc.) However, local practices were checked again with 3 other clinical psychologists from their first experiences, at an intermediate time, and after one year to see how their local practices had changed.As a result, local practices developed while the external environment and their inner experiences influenced each other.
Since local practice is conducted in an environment close to the practitioner's private environment, it was thought that daily changes were likely to be reflected directly on the local practices, and that the boundary between the two was not clear.

研究分野：臨床心理学

キーワード：地域実践　臨床心理士　コミュニティ臨床　実践特徴　展開プロセス　苦悩

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

臨床心理士資格認定協会監修による「新・臨床心理士になるために」(2018）では、臨床心理士の実践活動として「臨床心理学的地域援助」が挙げられており、地域への援助を臨床心理士における職務の大きな一つの柱として位置づけている。山本（2001）はこれを「地域社会で生活を営んでいる人々の、心の問題の発生予防、心の支援、社会的能力の向上、その人々が生活している心理的・社会的環境の調整、心に関する情報の提供などを行う臨床心理学的行為」と定義している。地域で日常を営む生活者を臨床心理学的行為の対象とするもので、予防対策に始まり、悩みを抱える人への心の支援、社会的能力の向上をめざした手助け、心理・社会的な環境の調整、さらには心の問題についての情報提供といった活動が具体的支援であるとされる。

しかしその一方、従来の臨床心理学の理論や枠組みだけでは、地域での臨床として求められるニーズに応ずることが難しい状況が増えてきた。未曾有の震災など、想定されることのなかった事態への対応など、多様化する社会のなかで臨床心理士に求められる介入のレベルは一様ではなく（村山 2003)、それらに対してどのように応ずるかという課題がある。こうした事態に心理臨床家は、既存の染みついたパラダイムからの転換を目指すことが必要である（山本,1986）と指摘されているが、従来の心理療法モデルと異なる支援が求められる臨床心理学的地域援助に対して、「まだ、抵抗や逡巡をもたらしているかも知れません」と星野（2008）は指摘する。こうした状況の中で臨床心理士は、日々の実践の中で「これが本当に心理臨床なのだろうか」と自問自答しながら活動している（平野,下川,2012)。

研究代表者を含めた研究グループでは、実践の場が面接室の内か外かという構造的枠組みに着目し両者には大きな違いがあることを明らかにすることで、地域での実践は従来の訓練から学んだ臨床心理士の態度が大きく異なっていることを示唆した（平野ら,2006)。こうした背景を踏まえ、対象者の拡大および対象フィールドの多様化にむけた心理臨床的知見を蓄積する研究が必要となっている。

２．研究の目的

平野ら（2007）はこれまでに、地域の実践活動にすでに携わっている２名の地域実践家が語る自身の実践ストーリーをもとに、実践プロセスの特徴を抽出した。その結果、地域実践の展開過程にみられた実践特徴は、理論に基づき論理的目的的に志向された活動ではなく、実践家の直観を頼りに活動する、非漸進的な特徴を持っていた。ただし上記調査は対象が臨床心理士ではなかった。

そこで本研究では上記研究を参考に、地域実践を手掛ける臨床心理士が語る実践ストーリーから実践の特徴を抽出し、臨床心理士による地域実践活動をモデル化することを目的とした。

３．研究の方法

本報告においては対象を 2 群に分けることとする。第１群は、地域実践に携わっていた臨床心理士 5 名である。対象の属性は表１に示すとおりだが、特定の地域で活動を行ってきた心理士であるという共通性がある。研究代表者らは、上記 5 名の対象者において、本報告書で示す研究に入るまでに個別に下記の観点でインタビュー調査を行っていた。①地域での実践はどのようにして始まるに至ったか、②地域での実践が始まって以降、どのような経過を辿って今に至ったかを基軸に、半構造化面接を用いる。時間経過に沿った形で、印象深く残ってるエピソードを順次語ってもらうこととした。得られたエピソードデータは文脈をなるべく切断することがないよう複数の調査員の合議のもとで抽出した。抽出されたエピソードを反映した一文を作成し、それらをカード化したのち、対象者ごとに類型化を行った。類型化された各カテゴリは当該の地域実践を構成する要素とした。ここまでの一連の手続きについては 5 名を対象として、各実践家すべての実践を構成する要素を抽出した（牧野ら, 2010,2011,2013,2014,2015)。

しかし第１研究では、対象者の活動地域が限定されていること、また単回のインタビュー研究であり、実践家の変化が時系列的に辿っていけないという問題点があった。そのため、第２研究では、第 2 群として他の 3 名の臨床心理士に縦断調査を行い、変化を時系列に追っていくこととした。3 名の調査対象者は表２に示すとおりである。その前提としてまずは、これまでの 5 名の実践家の特徴を集約し、共通する特徴を検討することで、今後の縦断調査における準拠モデルを作成する必要が生じた。

表１.対象者 第１群の属性

対象	性別	年代	調査時の地域実践経験年数	職種・支援対象など
A	女性	30 代	約 2 年	NPO 法人子ども相談事業理事長
B	女性	30 代	約 3 年	NPO 法人子ども相談事業
C	男性	30 代	約 10 年	福祉事業所運営など
D	男性	50 代	約 10 年	福祉事業所・SC など
E	女性	30 代	約 3 年	公的機関での地域保健活動

表２.対象者 第２群の属性

対象	性別	年代	調査時の地域実践経験年数	職種・支援対象など
F	男性	30 代	約 5 年	SC・地域住民へのコミュニティ支援
G	男性	30 代	約 5 年	教育相談施設でのソーシャルワーク
H	女性	30 代	約 5 年	児童居場所支援・教育相談関係など

４．研究成果

結果１「第一研究：先行研究の共通要素を探る」

５名の実践家による地域実践の特徴は以下の①～⑦に分類された。①方法論：実践家が地域実践活動を行う手法に関わるもの。②他者との関係性：実践の展開を手助けしてくれる周囲との関係、お互いに補い合うような関係、あるいは自身との違いが明確である関係など、実践家を取りまく周囲の人間関係に関わるもの。③ターニングポイント:実践家の思い切った決断や、一気に実践家の当該状況が大きく変化するポイントに関わるもの。④推進力：自身の理想像を追い求めたり、夢中になって取り組む姿勢など、実践家を活動へ推し進める動機となるもの。⑤主体性や受身性：受身的ながらも関与するという旨を含めて、実践家に生じる責任感や主体性に関するもの。⑥現実状況との葛藤：自身の動きが結実せず、現実状況との間で生じるもがきや空回り、切迫、逡巡などを含んだ葛藤に関わるもの。⑦浮き沈み：実践活動が盛り上がったり停滞したりという浮き沈みに関するもの。以上７つである。

これらの構成要素がどのような相互関係を持ち実践が進むかについて図式化したものを、図１として示す。「実践の動き」は想定された実践の動きを表しており、「実践家の姿勢」「アプローチ」は、実践に影響を与えると想定された概念を示すものである。

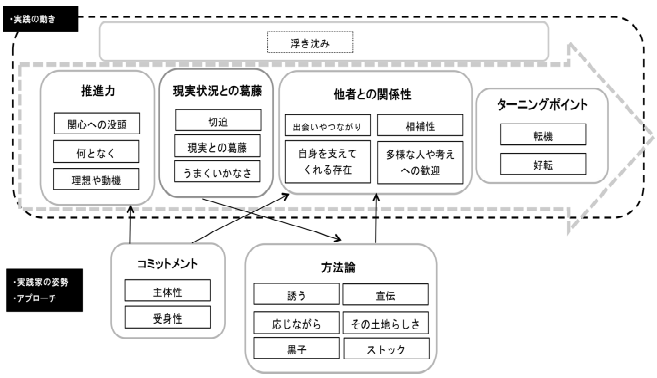

図 1. 実践の構成要素の相互関係とその動き

考察１

抽出された実践特徴を構成する下位項目は画一的な実践でまとまっていなかった。受身的に取り組む色をもつ実践家もいれば、積極的に関与を求める実践家もいる。一方で、各実践家達から抽出された特徴が最も数多く集約されたカテゴリは、実践の展開を手助けしてくれる周囲や、お互いに補い合う関係など、実践家を取りまく「他者との関係性」であった。これを踏まえるに、実践による成果や達成といった重きを置くべきと思われる特徴が数多く予想されるにもかかわらず、彼らによる地域実践は、周りの人達との関係に重きを置くのである。つまり、他者との関係性に基礎づけられた営みであろうと想定された。しかし、これまでの調査から得られた特徴からは把握するのが難しい点があった。それは、各実践家が現実的にどのような状況に置かれ、それが実践及び実践家をどう変化させたのかという動的なプロセスである。したがって、第二、第三研究では、実践家を縦断的に追跡し、発達的データを得ることを目指した。

(2)結果 2「第二研究：縦断研究にむけた１年目～３名の事例から」

(2)-1　初年度 F 氏の実践特徴

類型化によって得られた実践の特徴は合計 13 個であった。①環境：地域での心理臨床活動に参加するための機会や動機が、あらかじめ自分の周りにあった。②人との関わり：地域の活動へと積極的に取り組んでいく姿勢は、人との出会いや関わりの中で徐々に起きていった。③仲間：自分の活動について相談できる人間関係がある。④急き立て：急き立てられる出来事を機に、活動へ動き出す。⑤繋げる方法：自身の活動手法の一つとして、いかにして対象者を人との関わりに繋げていくかを大事にしている。⑥土地柄への敏感さ：活動する土地柄によってどんな点が異なるのか、敏感に捉えようとする。⑦応じる姿勢：間近に必要とされる、具体的な課題に応じた活動をすることが大事であった。⑧承諾：周囲から誘われたことに対して一旦は考えるものの、相手を信じて依頼を受ける姿勢でいる。⑨現実的制約との葛藤：クライエントを基準に活動の内容を考えながらも、評価や現実的な役割が入り込むことで難しさを感じる。⑩結果オーライ：大変な時はあるのだが、結果的には充実した活動に至る。⑪自分の体験：心理療法というわけではなく、子ども達と一緒に体験活動を過ごした経験から、現在の自分は大事な考え方を学んだ。⑫自己洞察：子供たちと関わる体験をもとに、自分自身の関わり方や自分自身の特性について、深く内省している。⑬不安定感への肯定：組織に属してもいなく不安定な立場で活動している自分を、肯定的にもとらえている。以上 13 個である。これらを語った順および経緯の順序に合わせ、得た実践プロセスの一部は以下のとおりである。

A 氏は「急き立て」られて自身の実践活動を行っていた。具体的には日々研修を受け、SV の助手をするなどであった。そんな中での活動手法は、対象者を人との関わりに繋げていくかが大事であった。自分の関わる土地柄によってどんな点が違うのかについて、気に掛けながら実践を行っていた。こうして実践へと能動的なかかわり方もあったのだが、一方で間近に必要とされることに応じることが大事であり、周囲から誘われて結局依頼を受けるような、受身的なかかわりもそこにはあった。これらは時期によって絡みながら展開していった。長らくすすんで行けば当該の活動を評価しなければならない事態に直面した。基準はクライエントのニーズであるが、現実的な役割がそこに入り込んでくるのであった。こうした F 氏の中心的な実践活動には、外的な環境からの影響があった。はじめからこうした活動に取り組む積極性があったと言うよりも、人との関わりの中で徐々にそれらは起きていった。そして自分の活動について相談をできる仲間が F 氏の周囲にはいたのであった。また、F 氏は元来心理療法一辺倒な考えを強く持っていたわけではなく、子ども達と共に体験活動を過ごした経験があったことで大事な考え方を学んでいた。こうした体験活動から自分の関わり方や特性を深く内省するという学びの在り方は、従来から自分にとって馴染みのことであった。

(2)-2　初年度 G 氏の実践特徴

類型化の結果として得られた H 氏の実践特徴は、下記 13 項目であった。①あえて危うさに身を置く：人間として、自身の生き方として何ができるかということと、いまの実践とが一致しており、後悔しないようあえてチャレンジする道を選び取り組む。②協力関係：立場や経験は様々でも意見を出し合い、共有、サポートする環境がある。③黒子：自分が前に出るのではなく、黒子的に様子をみながら動く。④地域性を踏まえる：その地域の歴史や政策、風土などを踏まえて支援に当たることを重視。⑤技法にとらわれない：心理的技法にとらわれず、様々なやり方で目の前の人と真剣に関わる。⑥一貫性を求める：肩書にこだわらず、フットワークを軽くしながらも自身をモニタリングし、地域に求められることにブレないよう意識している。⑦淡々と進む：劇的な転換点なく活動が広がり、実践が経過している。⑧反骨精神：肩書や効率より、しっかりとものを見る目や反骨精神を大切にする。⑨現実的制約：ハードワークな職場で支援がスムーズに行き届くようにすることの困難さを感じている。⑩実践的な学びの活用：現場で確かめた知識や経験を実際の支援や人との交渉の仕方に取り入れている。⑪社会に対する使命感：社会的関心から教育問題にかかわる仕事につき、一援助者として実践を通して社会に還元していく社会的使命を感じている。⑫折り合いをつけた職業選択：元々なりたい職業ではなかったが、やりたいことと生活とを両立できる仕事につきたいと思い、いまの職場に進んだ。⑬培ってきた教育的観点：教員や学生とかかわる機会が多く、そこで知った仕事や立場、コミュニケーションの経験が現場に役立った。以上 13 個である。

これらを語った順および経緯の順序に合わせ、実践プロセスの一部を以下に説明する。G 氏は、社会的関心から教育問題に関わる仕事に就き、一援助者として社会に還元したいという「社会に対する使命感」を持った。ついた仕事はハードワークで、支援がスムーズに行き届くようにするためにはさまざまな「現実的制約」があった。実践が全体として広がりをみせながら「淡々と進む」中で、G 氏自身は自分の生き方に後悔しないよう「あえて危ういところに身を置く」ことを意識し、肩書や効率にとらわれないで物事を見る目や「反骨精神」を大切にしていた。加えて、フットワーク軽く取り組みながらも地域に求められることにブレないよう「一貫性を求める」ことで、自身の生き方と実践とを一致させていられるよう常に意識しながら取り組んでいた。G 氏のインタビューでは、さまざまな「現実的制約」について語られるものの、劇的な変化や危機などは語られず、実践が「淡々と進む」語りが特徴的であった。

(2)-3 初年度 H 氏の実践特徴

類型化の結果として得られた H 氏の実践特徴は、下記 13 項目であった。①居場所の良い場を求める思い：居場所のいい場所を作りたいという昔からの思い。②目標への邁進：教育臨床という目標に邁進している。③生活の安定への希求：生活の安定を欲していたり、現在自分の大切な思いに集中できるのは生活の安定があるからだと感謝している。④日替わりの実践を選んでしまう：安定した生活を希求しながらも、日替わりの職業選択を選んでしまう自分もいる。⑤現場への入り方：現場に求められる形で入って役に立つ感覚を持ってもらうという、現場への入り方をしている。⑥現場のニーズと自分にスタイルとの間の模索：受け入れられない戸惑い、自分のやり方と職場環境の適応の難しさ。⑦自信がない：トレーニングが十分ではないと感じていることから、面接や業務に自信を持てない。⑧孤軍奮闘：職場内のトラブル・被害に対して納得がいくまで戦った。⑨逃げたくない：つらい体験から逃げたくないという思いで実践を再開する。⑩自身の本質への気付き：組織との関係で追いつめられたことで、働くのに何を大事にすべきかという事に気づいた。⑪プライベートによる実践の変化：プライベートの変化で実践を中断することになる。⑫継承：実践やそこに込められた思いが、後輩のスタッフに継承されていく。⑬実践の振り返り：今後、自身の実践を振り返りたいと言う願望を持っている。以上 13 個である。これらを語った順および経緯の順序に合わせ、プロセスを説明する。

H 氏にとって実践家になることを志す以前から持っていた「居場所のいい場所を求める思い」は、その後の実践選択に強く影響を与えていた。生活を安定させたい・安定した生活の上で実践に取り組みたいという「生活の安定を希求」する思いがあり、実際そうした職場を探してみたが、他方生活の安定性以外の観点で実践の場を選ぶ「日替わりの生活する上では不安定な実践活動を選択する」ようにもなっており、実践家としての自身のニードと、生活者としてのパ

ーソナルな自身のニードが交差的に展開していた。現場のニーズや枠組みに柔軟に自身のアプローチを変えていく「現場への入り方」を重視しながら、一方で「現場のニーズと自身のスタイルとの葛藤」を感じながら実践を行っていた。そこにはこれまで継続的な専門トレーニングを受けること不足していたという自身の感覚から生じる、実践への「自信のなさ」が関係していたとのことである。その後Ｈ氏にとっては危機とも言える実践現場での大きなトラブルが起こる。その被害に「孤軍奮闘」し立ち向かえたのは、この問題に逃げない姿勢が今後の実践家としての自分にとって意味があるのではないかとする「逃げたくない」思いがあったためであった。

考察２

本研究の結果を整理していく過程の中で、以下の３点の大まかな分類基準が設けられた。①具体的な活動として実践家が手掛けていたことを指し示す「具体的な実践活動」、②実践者の使命感や強い動機など実践に対する気持ちを指し示す「内的要因」、③実践者の外部で生じる環境要因を指し示す「外的要因」である。この分類で地域実践を行う臨床心理士の実践特徴を整理することは、筆者らのこれまでの研究では用いられていなかった。そこで地域実践の展開過程を上記３分類に沿って整理することで、ダイナミックな展開過程が描写しうると考えられた。

結果３「第三研究：初年度と一年後の特徴比較～３名の事例から」

第２研究の方法と同様の手続きを経て、実践家Ｆ氏～Ｈ氏より得られた一年後のエピソードデータをもとに、各実践特徴をとらえた。これらの特徴を前年の特徴結果と比較することで、どんな変化が生じているかについて検討した。これについては以下のとおりである。

(3)-1 Ｆ氏の実践特徴と初年度の実践特徴との比較

初年度データでＦ氏は、支援対象者を必要な場へとつなげる能動的働きかけはしていたものの、基本的に周囲からの要請に応じ急き立てられる実践が展開していた。１年経過すると、既存体制の影響力によってこれまでの実践は一時終結したが、それを機にＦ氏に実践へむけた主体的な態度が見られ、中心的役割を担って活動へ臨むに至った。以前から自身が考えていたことは間違ったものでなく、大事なことだとＦ氏は感じられるようになったのだった。また、以前の語りで全く触れられていなかった、旧知の知人と偶然に再会したことを語り、再会の際に関係を切らぬよう、積極的に関わりを求めてもいた。これも主体的に活動へと向かうＦ氏の内的変化と関連していた。以上のように実践家の内的側面と実践は、相互に関連しあっていたのであった。自らの考えに確かさを抱くようになると共に、自身がすでに持っていたリソースを再発見し、実践へと活かしていく変化がうかがわれた。

(3)-2 Ｇ氏の実践特徴と初年度の実践特徴との比較

実践家自身が強い思いを持って淡々と進む点が大きな特徴であった初年度データと比べ、一年後では終結を見据えながら、周囲や組織全体のことを自分より優先し、次世代につなぐことを大切にしていた。その中で、実践に影響を及ぼし合うと考えられる、内的要因と外的要因にもそれぞれ変化がみられた。まず、内的要因に関して初年度は、さまざまな「現実的制約」に苦しみながらも、「社会に対する使命感」や、前職で「培ってきた教育的観点」、自身の生き方と実践とに「一貫性を求める」姿勢といった内的な要因がみられた。一方１年後では、自らが仕事に留まることより周りのために自分がいかに貢献できるかを意識し、次世代につなぐことや、前向きに変化を受け入れる姿勢など、終結した先を意識していた。初年度に比べ、実践状況において負担や窮屈さが増していく中、Ｇ氏の実践に取り組む姿勢は終結を見据えた取り組み方へと変化しているが、自身の生き方と実践とを一貫させたいという姿勢は変わらない。また、外的要因の変化として、前データでは「協力関係」という仕事の上での対人関係がみられていたが、本データでは同僚との仲がより深まった「チームワークの高まり」、そしてプライベートな友人関係を含めた「友人とのつながり」に関する特徴がみられた。実践の終結を決意したことで、具体的な実践への取り組みが変化しただけでなく、自身のプライベートなことを含め、先々を意識した当該の実践のみに捕らわれない内的な要因の変化がうかがわれた。

(3)-3 Ｈ氏の実践特徴と初年度の実践特徴との比較

Ｈ氏の１年後の実践特徴として、プライベートな事情から実践を離れざるを得ないことになり、実践家に戻れるのかという不安や、昔の実践家としての自身の回顧など、実践家としてのアイデンティティが揺らぐ特徴が見られていた。この点は、初年度の調査で見られていた、危機から自身のアイデンティティを発見する過程とは異なる結果であった。一年後の調査では、その後に生じた「プライベートの大きな変化」を通して、共感的に支援対象者への理解が深まり、今後の実践家としてのあり方を再発見するプロセスが見られた。縦断経過からは、Ｈ氏が実践上の危機やプライベートでの大きな変化など、様々なターニングポイントを経験しながら、それを活かして新しい実践家としてのアイデンティティを発見している。また「プライベートでの大きな変化」が新たな思考や着想が生まれるきっかけとして作用していること、またその着想が得られた時期に、これまで忘れていた実践参入へのきっかけが想起され、自分のプライベートな体験から派生した新たな実践アイディアが生まれているという、外的環境と内的変化の循環的な変容プロセスが見られた。

総合考察

地域実践において、現実的な事柄と実践者の内的な変化は密接に結びつき、相互に影響を及

ぼしながら展開すると考えられた。地域での実践は、実践家のプライベートと隣り合わせに展開することが多く、自営業的に個人で行う形態が多いため、プライベートによる変化は実践にダイレクトに反映しやすいことから両者の境界は曖昧になりやすいかもしれない。実践の展開過程や変化が進んでいくにつれて、実践者は忘れていた過去の体験を想起していた。加えて、想起されたその体験は、現在や今後の実践を補うように意識化されるように体験されていたことが特徴的であった。この点から、地域実践における実践家のアイデンティティ形成においては、時系列的に経験が積み上がっていくというよりは、実践の展開の激しさや劇的さにともなう形で、自身の体験や記憶がその場にあった形で、再構成されていくと考えられる。このことを言い換えると、地域実践モデルは面接室内モデルに比べ、プライベートの変化がより実践展開に反映されやすいため、ある種ランダムな現在の外的環境の変化に適応できる内的構えが求められるということではないだろうか。こういった地域実践における状況変化の偶発性、またそういった偶発性を歓迎しその場その時に適った対応を取る地域実践家の特徴を「ローカルな視点」（平野ら，2006）としてまとめられていた。しかし本研究から示唆できることとして、そこでは実践家が環境変化に応じるために、体験の再構成が生じていると考えられた。

また一連の本研究データでは、「うまくいかない」などの実践者の苦悩が多く語られていた。先行研究では、実践変化における偶然性を肯定的にとらえようとする実践者の姿勢を重視し、迷いや苦悩は、“ 模索 ” など行動の現れとして表現されてきた(平野ら,2006 等)。しかし本データでは、大きな変化の前後に内的な「苦悩」が伴っており、外的な状況が変化する境遇に何とか対処しようとする実践家の姿がうかがわれた。実践家が選択を迫られる場面で、多様な選択肢の中から主体的に決定する以外に、「そうせざるを得なかった」という決定があり、苦悩ゆえの努力や対処の結果が、実践を方向づけていく可能性が示唆された。実践において苦悩し、後になってそれは初めてターニングポイントだったとわかる。選択された道筋が事後的に意味を持つ決定のされ方が生じ得ると推察された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

平野直己（2018）遊べない子どもと遊ぶ　子育て支援と心理臨床,vol.14,pp31-36.福村出版.

〔学会発表〕（計８件）

牧野高壮、小田切亮、新田大志（2015）地域実践の中で臨床心理士が経験していること-実践を始めて間もない臨床心理士へのインタビューを通して-　日本心理臨床学会第 34 回大会発表論文集 p661

後藤龍太・長谷川香奈・中谷紫乃・菅原博子・山下温子・平野直己（2015）専門家同士をつなぐコミュニティづくりの実践(5)：実践プロセス中盤にあらためて実践の意義に立ち返る，日本心理臨床学会第 34 回秋季大会(神戸市)

牧野高壮、新田大志、小田切亮（2016）地域実践を行う臨床心理士の実践特徴　日本心理臨床学会第 35 回大会発表論文集 p333

中谷紫乃・菅原博子・後藤龍太・山下温子・長谷川香奈・平野直己（2016）他職種多領域の専門家が集まるコミュニティの機能：コミュニティのもつ機能とコミュニティの凝集性・多様性，日本心理臨床学会第 35 回秋季大会(横浜市).

山下温子・後藤龍太・長谷川香奈・中谷紫乃・菅原博子・平野直己（2016）専門家同士をつなぐコミュニティづくりの実践（６）：コミュニティの変容と成長のための２つの挑戦,日本心理臨床学会第 35 回秋季大会(横浜市)

牧野高壮,小田切亮,新田大志（2017）地域実践を行う臨床心理士の実践特徴２　日本心理臨床学会第 36 回大会発表論文集 p556

牧野高壮、新田大志、小田切亮（2018）地域実践を行う臨床心理士の実践特徴３　日本心理臨床学会第 37 回大会発表論文集 p313

菅原博子・後藤龍太・中谷紫乃・山下温子・平野直己（2018）専門家同士をつなぐコミュニティづくりの実践（７）　日本心理臨床学会第 36 回大会(横浜市)

〔図書〕（計２件）

平野直己（2016）第１１章「シーシュポスはほほ笑む― 精神分析は非行の地域心理臨床から何を学ぶか？ 祖父江典人・細澤仁（編）日常臨床に活かす精神分析：現場に生きる臨床家のために,誠信書房,p212-228.

牧野高壮（2018）いかにして「当たる」ことができるかという支援，公益財団法人矯正協会編，更生を支援する民間協力者-心の触れ合いの中でⅡ-,公益財団法人矯正協会,p279-290.

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：平野　直己　　ローマ字氏名：Hirano,Naoki　　所属研究機関名：北海道教育大学　　部局名：教育学部　　職名：教授　　研究者番号（8 桁）：80281864

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小田切　亮　　ローマ字氏名：Odagiri,Ryo

研究協力者氏名：新田　大志　　ローマ字氏名：Nitta,Taishi